

# 父と子との関係

## ——アジャセとオイディプース——

藤 井 稔

ここでは父とその息子との関係において生ずる苦悩とその救いを、一つはインドにおけるアジャセ（阿闍世）の物語、もう一つはギリシャにおけるオイディプース<sup>1)</sup>の物語を通じて論ずる。両者は紀元前の東洋と西洋における物語であるが王である父をその息子が殺害するということが物語の中心になっている。物語はその動機、その他の点で異なるところもあるが、父を殺害することがどんな大罪であるか、その結果当然のこととして、その息子であるアジャセもオイディプースも心身に非常な苦しみを背負うことになる。その苦しみに対してこの両者はそれぞれどのように対処したのであろうか。

### アジャセの場合

「……『劫初よりこのかた、もろもろの悪王あり。国位を貪るがゆえに、その父を殺害するもの、一万八千人なり』と。しかるにいまだかつて、無道に母を害するものあるを聞かず。……」

アジャセが父王を幽閉し、母イダイケ（韋提希）はそれを助けるために密かに飲食を運ぶのを知り、怒ったアジャセが剣をとって母を殺そうとしたときに、家臣のガッコウ（月光）とギバ（耆婆）はこういって、剣の柄に手をかけて、諫めた。

これは浄土三部経のうちの観無量寿経の冒頭部分に描かれていることである。このアジャセの物語は親鸞の著書『教行信証』の「信の巻」に長く引用されている『涅槃経』<sup>2)</sup>に詳しい。

以下、涅槃經に描かれているアジャセの物語を整理して、簡略に述べる。

釈迦の従兄弟のダイバダッタ(提婆達多)は釈迦の教団を破壊しようとして、アジャセをそそのかし、その出生の秘密を聞かせる。それは「アジャセが生まれる前から、国中の占い師が一人残らず、“この子は生まれるときっとその父を殺すに違いない。”と言った」ことに始まる。

これを聞いたアジャセの母イダイケはアジャセを産んで、高樓から落とした。しかしそのとき指一本を折っただけで<sup>3)</sup>アジャセは生き長らえた。自分の指に残る傷跡と、ことの正否を確かめた上で、アジャセは父を城外に幽閉した。冒頭の、母イダイケを殺害しようとしたのは、この父王を助けようとする母に対しての怒りのあまりの所業であった。母の助けが途絶えて、まもなく王は命を落とした。

父を殺害したことにより、アジャセの心に悔悟と煩悶が生じ、体中に瘡が出来、臭く、汚く、人も近寄れない。母イダイケは種々の薬を塗って看病するが、効なく、瘡はますます酷くなるばかり、アジャセは母に言った。「このような瘡は“こころ”より生ずるもので“身体”から起こっているではありません。」

家臣たちは各々心身を癒すという当時の指導者(六師外道)を紹介するが、アジャセの心身は癒されない。

「私は仏の教えを奉ずる父王を非道にも殺害したからには、必ず地獄に落ちるであろう。無上の名医がいれば病苦は除かれるのに」と苦悶する。そこで家臣であり名医でもあるギバが「釈迦如来は師につかないで、真実の理法のままに悟りを開き、最高至上の悟りを得られた。この人こそ、名医であり、(前述の)六師外道の類ではない。」と言った。

そのとき、空中から声がして、「……どうか速く仏のみもとを訪ねてもらいたい。他に良く救えるものはいないであろう。……」アジャセはそれを聞いて、「天空にいるのは誰か。姿を見せないでただ声だけするのは。」

「私はお前の父ビンバシャラ(頻婆沙羅)である。お前は今ギバの言葉に従わなくてはいけない。邪な考えを抱く六人の家臣の言葉に従ってはならない。」

そのころ釈迦は三月を過ぎると入滅することを悟ったが、「アジャセのため

に涅槃に入らず。（アジャセを救わなければ仏の悟りに入ることはできない）」と。

まず釈迦はアジャセのために月愛三昧に入り、その光清涼にして、アジャセの身を照らすとたちまちにアジャセの身体の瘡は癒えた。釈迦はこの光を放ってまず身体の治療をし、ギバが言ったように優れた名医であることを示した。その後で心の病に及ぶ。

アジャセは象に乗ってギバとともに釈迦のもとを訪れるときに「私はお前と同じ象と一緒に乗っていたい。たとえ、私が地獄に堕ちると決まっても、頼むから、全身でしっかりと私を捉えて、地獄に堕さないようにしてくれ。なぜなら道を得た人は地獄に堕ちないとかって聞いたことがあるから。」

釈迦の説法が始まる。

「もしアジャセが罪をうるなら、世に尊ばれる仏たちもつみをうることになる。もしきみが父を殺して罪があるものなら、わたしたち仏もまた罪があることになる。もし世に尊ばれる仏たちの罪をうることはないなら、きみ一人がどうして罪をえようか。」

釈迦の教えの根本である『空』、『無我』が説かれ、これを聞いて、アジャセのころは百八十度転回し“真実”を獲得する。

「世尊、われ世間を見るに、伊蘭子（悪臭の強い伊蘭の種）より伊蘭樹を生ずるを見る。伊蘭子より（香りの良い）梅檀樹を生ずるを見ず。われいま始めて伊蘭子より梅檀樹を生ずるを見る。伊蘭子はわが身これなり。梅檀樹はこれわが心、無根の信なり。……」

アジャセの苦悩は正に釈迦の教えによって救われた。

#### オイディプスの場合<sup>4)</sup>

フロイトの精神分析の中でも有名なエディプス・コンプレックスの概念と関わって、ギリシャ悲劇の中で最高傑作の一つである、ソポクレスのオイディプス王（ギリシャ神話による）は良く知られている。

古代ギリシャの国テーバイの民を苦しめていたスピュクス（スフィンクス）

の謎を解き、最高の人智を有するとされたオイディプスはテーバイを救った。そのため彼は推されて王ラーイオスなき後のテーバイの王位につき、その妃イオカステを妻として、四人の子を儲けた。しかしテーバイの上にまた大きな災難が次々と降りかかる。「ポイボス・アポローンがわれらの伺いに答えたもうた神託によれば」とオイディプスはいう。「この災厄から解放される途はただ一つ、先王ラーイオスの殺害者どもを正しくつきとめた上で、死を持って罰し、もしくはこの地より追放することのあるのみ。」と見定めたが、先王殺しの犯人は実は自分であることが次第に明らかになる。

先王ラーイオスがアポローンの神託を得るために旅に出た途中で殺害されたが実はその犯人はオイディプスであった。

これより以前に話は遡る。それはラーイオスはポイボス・アポローンの神託により「自分はやがて生まれるこどもの手にかかって亡き者にされるべき運命にある」ことを告げられる。これを恐れてラーイオスは妃イオカステとの間に一子が生まれてまだ三日もたたぬとき、ラーイオスが留め金で両くるぶしを刺し貫いた上<sup>5)</sup>で牧人であった家僕の一人に手渡し人跡なき山の奥深くに捨て去って、この世から葬り去るように命じた。オイディプスはその後成長して放浪の旅を続ける途中、偶然にも父王ラーイオス一行に遭遇し、ラーイオスを殺害した。イオカステもことの真相を知り、首をくくって死ぬ。それを見て、オイディプスは妃の上衣を飾っていた黄金作りの留め金を引き抜くなり、高くそれを振りかざし、自分の両眼深く突き刺しつづけた。

スピックスの謎を解き、最高の人智を有するオイディプスも自分の運命を予知できなかった。

これは悲劇であり、その当然の結末として微塵の救いもない。このような悲劇の極みに何の救いもないのであろうか。

同じソポクレスの最後の作であり、彼の死後、演じられたという「コロノスのオイディプス」<sup>6)</sup>という作品では、救いとまではいえないが、少しの安堵が感じられる。この作品では上述の悲劇の後、オイディプスはテーバイを追われ、娘とともに放浪し、最後の死に場所を見いだして、独り身を隠すと

## 父と子との関係（藤井）

いうものである。その中でオイディプスは悲劇の苦しみに打ちのめされるのではなく、むしろ自ら犯した行為は自らの意志に基づいて行ったものではなく、すべて神託によるものであるとして、自分の罪ではなく、むしろ自分は被害者であると弁解し、自らを慰める。そして神託によって予言された通り、自らの休息の場所を見だし、身を隠す。

最後に自らの母との間に生まれた二人の娘が父を失った嘆きに対して、コロスは「いやいや、あの人は幸福にこの世去ったのだから。」ということで「コロノスのオイディプス」を救いようのない「オイディプス王」の悲劇の結末の救いの物語と見ることも出来よう。

アジャセとオイディプスの物語はいずれもが父殺しという大罪を扱ったものであるが、この問題の背景には父殺しとは逆の子殺しがある。生まれる子がやがて父親を殺すであろうと言う予言の基に、アジャセの場合には産んで高樓から落とし、オイディプスの場合には留め金で両くるぶしを刺し貫いて、山の奥深く捨てさせる。我が子を抹殺することを望んでのことである。しかもこの両者のそれぞれの傷跡が親が自分を亡き者にしようとした証拠になる。

これに対してもっと直接的に子を殺すことを題材にしたのは、ルーベンスやゴヤによって描かれた「我が子を喰らうサートウルヌス」である。

ローマ神話に登場するサートウルヌスは「自分の子によって、王座から追放される。」という予言によって、生まれた子どもをを次々と喰らう。しかしサートウルヌスも六番目の子ユーピテルによって追放される。

「サートウルヌス」の絵画にしても、「オイディプス」の悲劇にしてもそれらはいずれも芸術の分野に属する。フロイトの鋭い洞察は「オイディプス王」の中に人間が太古から有するところの深層（無意識の世界）に潜むコンプレックス、すなわちエディプス・コンプレックス<sup>7)</sup>を見だし、神経症の治療の方法としての精神分析の重要な概念の一つを構成した。一方、アジャセは仏教の経典の中に叙述され、苦悩の救済が主題であり、親鸞はそこに己の信仰の原点を見いだした。

どうしてこのように芸術や宗教において、父殺しがその題材として繰り返し採り上げられるのであろうか。

確かに歴史上の事実として同様の事が多く見られたこともあるであろう。<sup>8)</sup>しかし父殺しが許されざる大罪であり、そのことによって犯した罪に苦しむという点でアジャセもオイディプスも同じである。犯してはならないことを犯して苦しむというのはどうしてであろうか。

この問題を芸術、宗教から少し離れて、生物学、とくに比較行動学の観点から見るとどうであろうか。父殺しを人間の根元的苦しみの一つと見るならば、動物でもある人間と他の動物を比較してみるとどうなるであろうか。

多くの動物は子育てを終わると、独り立ちできる子どもを巣あるいは縄張りから追い出す。哺乳類の中には雄が自分の子どもを縄張りから積極的に、攻撃的に追い出すことも見られる。これは自然の摂理、すなわち種の保存の法則に従ってなされる、いわば本能的な行動である。

しかし人間の場合には親子の情は親が子を追い出すことを赦さないようにみえる。しかし我が子を喰らうという極端にまでは至らなくてもオイディプスもアジャセもともに生まれて間もなく親により密かに亡き者にされようとする。それを子が知ること子で父親への憎しみは増し、人倫に反すること（父殺し）を無意識的に（知らないで）あるいは意識的に犯すことになる。しかしそれはまた大いなる罪と見なされる。それにもかかわらずその罪を犯すことは当人にとっては大きな苦悩の種となる。

人間は自然の摂理にそのまま従っては行動できない。そしてそこにもともと生ずる矛盾、葛藤を避けられないことから苦悩が生ずる。しかしその苦悩からの救いはまた人間の発想から産み出されるものである。すなわち全てのしがらみからの離脱、解放による“こころ”の全自由の獲得ということである。まさに「伊蘭子から梅檀樹が生ずる」ほどの心の転換が自らが生み出す苦悩からの救いとなろう。そしてそれは人間の獲得した“ことば”によってなされる。これが人間の営みである。

## 父と子との関係（藤井）

### 注

- 1) 日本では精神分析用語としてのエディプス・コンプレックスからエディプスという語が一般的に用いられるがここではギリシャ悲劇の新訳の表記を用いることにする。その他のギリシャ語等についても同様。
- 2) これは略称であるがこれに関わる経典については次にあげる定方に詳しい。  
定方晟 1984；阿闍世のすくい—仏における罪と救済— 人文書院  
定方晟 1989；阿闍世のさとり—佛と文殊の空のおしえ— 人文書院  
なお本文では次の書を参考にした。石田瑞磨 1976；教行信証（注釈親鸞全集）上 春秋社
- 3) このため人はアジャセのことを指折れとも呼んでいた。
- 4) 次の2書を参考にした。  
ソポクレス；オイディプス王（藤澤令夫訳）1967 岩波書店  
ソポクレス；オイディプス王（岡道男訳）1990；ギリシャ悲劇3 岩波書店
- 5) オイディプスはふくれ足あるいは腫れ足という名
- 6) 次の2書参考にした。  
ソポクレス；コロノスのオイディプス（高津春繁訳）1973 岩波書店  
ソポクレス；（引地正俊訳）1990；コロノスのオイディプス ギリシャ悲劇3 岩波書店
- 7) アジャセと係ってはアジャセ・コンプレックスという問題がある。この概念は、初めフロイトの直弟子の古澤平作によってフロイトに提出されたものであり、のちに小此木啓吾によって一般的になった。しかし定方晟がすでに指摘しているように前に述べた原典の涅槃経では父子の関係が問題とされているのに対してアジャセ・コンプレックスでは母子の関係が採り上げられている。原典から何を読み取るかはそれぞれの自由であるが、古澤は浄土真宗の伝統的伝導（説教）の影響を受けているようであり、小此木はそれを日本人の心性に引き合わせているように思える。アジャセ・コンプレックスについては次の書を参照。  
阿闍世コンプレックス 2001；小此木啓吾，北山修編 創元社
- 8) 冒頭の観無量寿経にも父を殺すもの一万八千とある如く、このような例は歴史上多くみられたのであろうが、アジャセもまたその子に殺されたといわれている。史実としては問題もあるであろうがこれについては次を参照。なおこの中ではアジャセについての教典にも触れられている。  
末木文美士 1992；浄土仏教の思想—観無量寿経— 講談社